

## 那珂川アユ漁獲量調査（平成23年度／県単）

吉田 豊

### 目的

那須岳を水源とし、茨城県ひたちなか市で太平洋に注ぐ那珂川は、アユの河川別漁獲量が全国第1位である。<sup>1)</sup>豊富な那珂川のアユ資源を今後も持続的に活用するには、漁獲の動向を把握した上で適正な漁場運営を行うことが必須である。そこで今年度も引き続き、那珂川におけるアユの漁獲状況について調査した。

### 材料および方法

**釣りによる漁獲状況** 調査票150枚を栃木県那珂川漁業協同組合連合会会員4漁協に対し、前年の賦課金納入者数に応じて一定割合になるよう配布した。各組合それぞれが選定した調査員に対し6月1日の釣り解禁から禁漁までの間、釣りを行ったすべての日の釣獲尾数（釣果なしも含む）の記録を依頼した。無記入の調査票は、出漁日数を0として扱った。回答率は76%であった。

**投網による漁獲状況** 調査票50枚を釣りと同様の方法で各組合の調査員に配布し、調査を行った（投網は7月10日から区間毎に順次解禁される）。回答率は72%であった。

**釣獲魚の体重** 各漁協の組合員各1名に対し6月から10月の漁期中に釣行した場所と釣獲したすべてのアユの体重、下顎側線孔による放流魚、天然魚の判別結果について記録を依頼し、黒羽、烏山、茂木の各地区で釣獲されたアユの月および旬ごとの平均体重と放流魚の割合を求めた。

### 結果および考察

**釣れ具合・獲れ具合** 1人1日あたりの釣れ具合は9.4尾で、平成（平成6年から平成22年までの平均値）より0.8尾少なかった（図1）。

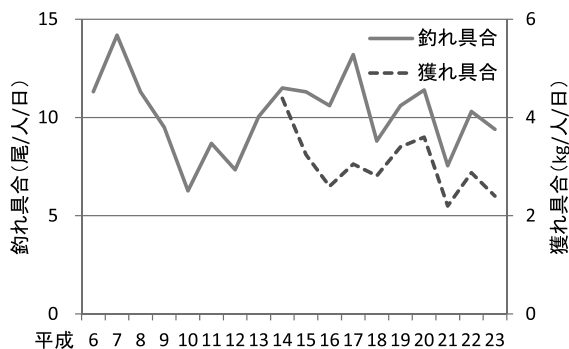


図1 釣れ具合および投網による獲れ具合の推移

月別では平年と比較し、解禁直後である6月は少なかったが、7月および8月は同程度まで回復した（図2）。この理由として、遡上群数は多かったものの、早期に遡上した群れが少なかったことが考えられる。また、近年釣れ具合が良くなっている9月以降で、今年度は大きく落ち込んだが、これは8

月中旬にエドワジエラ・イクタルリ感染症が発生したことや、9月21日に本県を通過した台風15号による増水などが影響したものと考えられる。

投網による1人1日あたりの獲れ具合は2.5kgで、平成（平成14年から平成22年までの平均値、以下「平年（平成14年以降）」とする）より0.5kg少なかった。

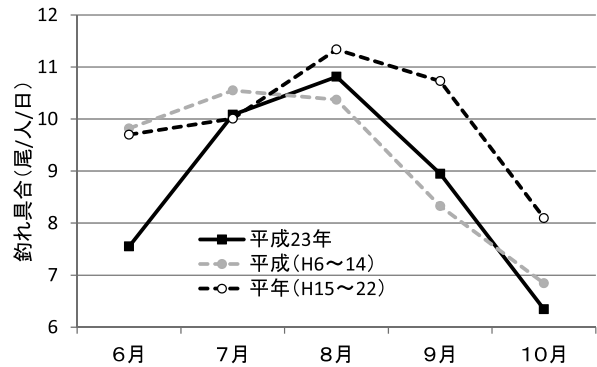


図2 月別釣れ具合の推移

**釣獲尾数・漁獲重量** 釣獲尾数は231万尾で、平年より245万尾少なく、半分以下となった（図3）。釣獲重量は126tで、平年より112t少なかった。これらの理由として、漁期前半の釣れ具合の低迷に加え、後述の入漁者数の伸び悩みが影響したものと考えられる。

一方、投網による漁獲重量は65tで、平年（平成14年以降）の半分程度となった。

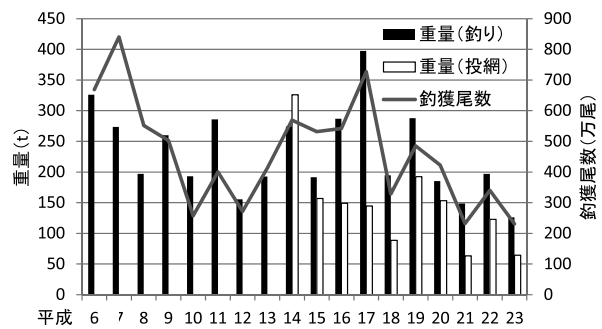


図3 釣獲尾数・釣獲重量・投網による漁獲重量の推移

**釣獲魚の体重** 釣獲魚の年間平均体重は54gで（図4）、平年より1g大きかった。漁期中の釣獲魚の体重は、6月上旬および9月上旬では平年より小さかったが、それ以外では平年と同程度かやや大きい傾向が認められた（図5）。

**釣獲魚に占める放流魚の割合** 放流魚の割合は、黒羽地区では6月に放流魚の割合が44%と比較的高かったが、その後は徐々に減少する傾向が認められた（図6）。その他の地区や月では10~30%程度で推移した。これらのことから今年度についても那珂川では、天然魚が漁獲の中心になっていることが確認された。

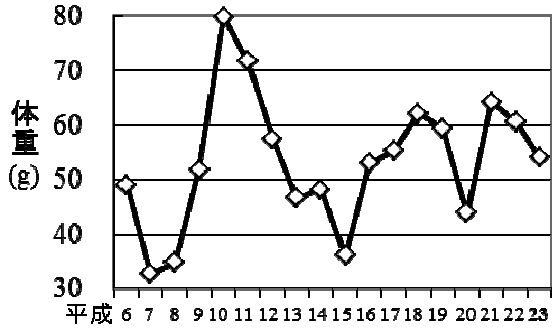


図4 釣獲魚の体重の推移

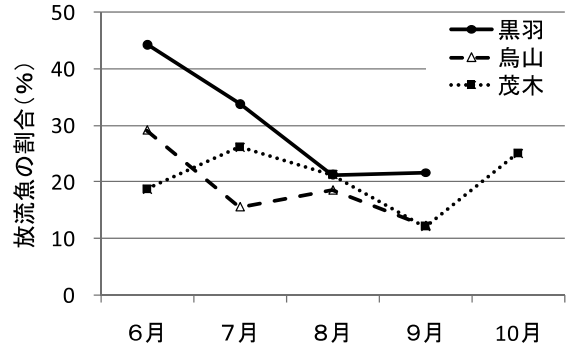


図6 地区および月別の釣獲魚に占める放流魚の割合

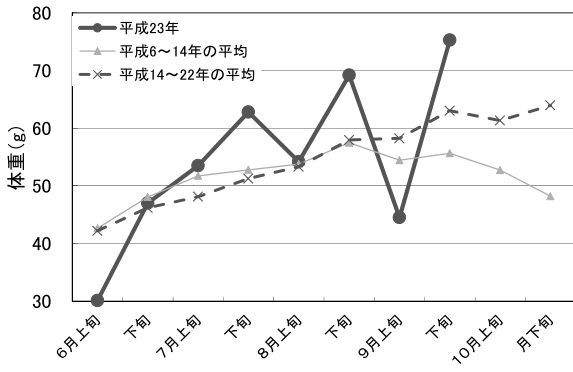


図5 月別の釣獲魚の体重の推移

**入漁者数** 釣り入漁者数は延べ25万人で、平年(46万人)より21万人少なかった(図7)。投網入漁者数は延べ2.7万人で、平年(平成14年以降)より2.1万人少なかった。今年度の入漁者数の低迷は漁期前半の釣れ具合の低迷に加え、東日本大震災に伴う福島第1原子力発電所の事故による風評の影響が大きかったものと考えられた。

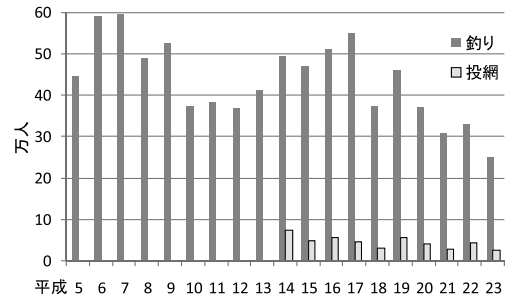


図7 入漁者数の推移

- 1) 平成20年度漁業・養殖業生産統計年報. 農林水産省大臣官房統計部, 東京. 2010.

(指導環境部)